

(一) 次の文を読んで、あとの問に答えよ

具体的な例から始めてみよう。日本家屋は、周囲のいなしい敷面を縁取る「縁側」<sup>えんがわ</sup>や、地面の高さの「玄関」や、「軒」<sup>のき</sup>などで、内部と外部の間の境界領域をしつらえている。このような領域には「縁」<sup>えん</sup>という概念がつきまとうが、この言葉がさまざまな意味で頻繁に用いられることは、日本の社会があらゆる分野において、仲「カイ」ということを、またその動作主体となる象徴的第三者を、きわめて重視していることを明らかにしている。こうした価値づけは、日本の空間性を支える（幾何学的ではなく）位相的な論理から出てくる。事実おのおのの場所の特異性を強調する限り、重要なのは、おのおのの場所とその隣接する場所のひとつひとつとの関係を作り出すことである。この原則は、具体的な空間において、また物質的にのみ表現されるわけではない。空間一般において、すなわち関係の体系すべてにおいて表現されるのである。「a」自然／文化の関係の場合列の<sup>2</sup>ケン著である。たとえば、「縁側」は家と庭の間で象徴的第三者として機能する。鎮守の森<sup>ちんじゅ</sup>(注1)は、都市と神々の間で象徴的第三者として働く。これらの第三項は、関係づけている二つの分野両方の特徴を持つ。しかし、そのどちらにも、<sup>3</sup>カ<sup>1</sup>元<sup>2</sup>することはできない。「縁側」は、中でも外でもないし、自然でも文化でもない。そうではなくて、おのおのの対の両方の項の性質を持つのである。

**第三者を排<sup>4</sup>ジヨ**しない論理、すなわち「縁」の論理は、不完全性の論理、すなわち「<sup>5</sup>間」の論理を補強する。事実どちらも外的なもの（関係）を重視し、その分だけ内的なもの（本質、固有の実質）を過小評価する。実体Aは、実体Bとの関係Cにおいてのみ真に存在することが前提とされ、逆もまた然りなのである。

<sup>1</sup>この相対主義は、定義自体により象徴化を促すことになる。AもBもそれ自体では完全に存在せず、他のものでもあるという限りに存在するのである。不完全性は象徴化を求め、象徴化は「縁」によって実現される。家は「縁側」によって自然と関係づけられて初めて、真に住めるようになるのである。また逆に、庭は家に対する補完性において、初めて意味を持つ。「b」、実際に歩き回るには小さすぎて、「縁側」から眺めるだけの庭もある。特に、禅寺の石庭の場合がそれにあたる。

個別の例として「縁側」、一般的な例として「縁」、これらは、「C」、二つの分野の間でメタファー<sup>(注2)</sup>が成立する場として現れる。ある観点からは、このような作用は、実のところ隣接性の関係（メトニミー<sup>注3</sup>）として解釈できる。たとえば「縁側」は家／庭というメトニミーを物質化したものであると言えよう。けれども、このような観点からは、その関係の純粋に象徴的な次元、すなわち自然から文化への移行が見えなくなってしまう。同

様に鎮守の森の葉叢<sup>はむら</sup>(注4)は、それが物質的に隠している聖域の存在をメトニミーとして示していると言うこともできる。しかしながら、聖性、つまり聖域とそれを取り囲む森の存在が拡がる次元は、メトニミーではなくメタファーに属しているのである。森を横切って進み聖域に至る、これは聖性の中を進むことであり、<sup>メタファー</sup>隠喩的には、植生としての森を通過儀礼としての森に移すことを意味する。この移動自体が別の行程を象徴する。すなわち、文化（都市）／自然（森）／超自然（神社仏閣によって物質化された神々の領域）という移行である。あらゆる<sup>いき</sup>閾<sup>(注5)</sup>について同じことが言える。境界域性、「d」両義性と通過がメタファーを始動させ、これを移動が具現化するのである。

注1 鎮守の森……土地の守り神を安置する神社の境内およびその周囲の森。

注2 メタファー……やかんの開口部を「やかんのロ」と呼ぶように、二つのものが似ていることに基づいて、一方を他方にたとえる表現。

注3 メトニミー……やかんの中の水が沸騰することを「やかんが沸く」と言うように、「全体」（ここでは容器）と「部分」（ここでは内容物）の関係に基づいて、一方を他方で言い換える表現。

注4 葉叢……こんもりと茂った葉。

注5 闕……微妙に異なる同種類の項目同士の違いが見分けられるかどうかの境目。

問一 傍線1～4にあたる漢字を、それぞれ次の(ア)～(オ)の中から一つずつ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

1	(ア) 介	(イ) 塊	(ウ) 壊	(エ) 拐	(オ) 戒
2	(ア) 堅	(イ) 献	(ウ) 賢	(エ) 遣	(オ) 顕
3	(ア) 寛	(イ) 還	(ウ) 歓	(エ) 環	(オ) 換
4	(ア) 叙	(イ) 徐	(ウ) 如	(エ) 除	(オ) 助

問二 空欄「a」～「d」に入るもつとも適当な語を、それぞれ次の(ア)～(オ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

a	(ア) とはいえ	(イ) されど	(ウ) とりわけ	(エ) いかにも	(オ) それでいて
b	(ア) あたかも	(イ) もつとも	(ウ) あながち	(エ) なかんずく	(オ) けっきょく
c	(ア) それでも	(イ) しかるに	(ウ) たとえば	(エ) したがって	(オ) ともあれ
d	(ア) さらに	(イ) すなわち	(ウ) さながら	(エ) あまつさえ	(オ) おそらく

問三 傍線部Iの「この相対主義」を説明した箇所を、第三段落（「この相対主義は」から始まる段落）の文中から抜き出した場合、その箇所の最初と最後の四字は次のどれか。次の(ア)～(オ)の中からもつとも適当なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) 定義自体……になる。 (イ) AもBも……である。 (ウ) 不完全性……される。
- (エ) 家は「縁……」である。 (オ) 庭は家に……を持つ。

問四 傍線部 の部分は、「鎮守の森」を具体例として考えると、なにがどうなってしまうことなのか。次の(ア)～(エ)の中からもつとも適当なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

(ア) 鎮守の森は、それが包み込んで隠している聖域の存在をメトニミーとして表しているということが分からなくなってしまう。

(イ) 聖性の存在と、鎮守の森が取り囲む聖域の存在の関係が、メトニミーなのか、メタファーに属するものなのか判断できなくなってしまう。

(ウ) 鎮守の森を抜けて神社へ行くことと、人が文化から聖域に移動するときに通過儀礼を与えられることとのメタフォリカルな関係に考えが及ばなくなってしまう。

(エ) 文化から都市へ、自然から鎮守の森へ、そして超自然から神々の聖域へのそれぞれの移動が純粹に象徴的なものであることが見過ごされてしまう。

(二) 次の文を読んで、あとの間に答えよ

僕は書籍のデザインを手がけることが多く、物事をそういう形にまとめることが好きでもある。しかし今日、情報テクノロジーは加速度的に進化し、情報の形も様々になった。そんな状況にあつては、書籍はもはやメディアとしての主役を降りたのだと考えるべきかもしれない。情報を流通させる速度や密度、そしてその量などに関して、書籍と電子メディアでは既に比較にならない。しかし一方で、書籍の役割そのものがついえ去ったとも考えにくい。おそらくは、このあたりで一度、僕らは「書籍とは何か」ということを再確認する必要があるだろう。それをしないまま、従来の方法で書籍のデザイン軒続けていくのはいかにも時代認識が甘いように感じるのである。

「(ア)」

冷静に眺めてみると、紙という素材はメディアとして随分と重い責任を担わされてきた。特に情報の流通速度がどんどん加速していく時代においては、紙はマテリアル(注1)である前に「無意識の平面」であつたといつていいかもしれない。万年筆で手紙を書くにも、プリンターで画像を出力するにも、まずはニュートラルな白い平面としての紙がそこにあつた。それは1対 2という「」な比率を持つ白い画面で、物質性はむしろ捨象され、映像や文字を運搬する「」な媒介物として認識されていた。世界の三大発明として紙が与えられている名譽もまさにそういうニュートラルなメディアとしての性質に対してであつて、天然物に触れる喜びを指先に運んでくれる物性に対してではない。だからモニタースクリーン(注2)が常に身近に置かれるようになったとき、人々はその素材としての性質や魅力を考慮することなく「ペーパーレス(注3)」という言葉を口にしたのである。

そういう観点から考えると、今日、紙はメディアの主役を降りて、実務的な任務から解放されたおかげで、再び本来の「物質」として魅力的にふるまうことが許されるようになったのではないか。僕はそんなふう思うのである。

「(イ)」

確かに書籍は、一定の情報をストック(注4)するメディアとしては大袈裟かもしれない。重いし、かさ張るし、汚れるし、風化もする。デジタルデータ(注5)にして格納すればごくごく小さなメモリーの中におさまる程度の情報報が、わざわざ書籍の大きさに仕立てられているわけである。しかしながら情報は、大量にストックしたり高速で移動させたりするだけのものではない。むしろ、情報と個人の関係を冷静に洞察するならば、情報をいかにじっくりと味わえるかというポイントが重要になってくるのである。書籍に関していうならば、「甲」の方が、「乙」より人に心地よい使用感と満足をもたらせるかもしれないのである。「(ウ)」

僕は現在でも書籍というメディアが有効であると思うし、その効果は社会が考えているほど減退してはいないと考えている。あなたが今、手にしているこの本にしてもそうだ。自分の頭から生まれ出た言葉の数々を、閲覧しやすい便利な場所においておけばいいのであれば、ウェブの中か、あるいはCDのようなものに格納するという方法もある。しかし僕はこうして本というメディアを選んでいく。それはこの情報を、紙に刷られた文字として味わっていたりしたいからであり、手ごたえのある重量を持った物質として人に手渡したいからである。また、電車の中で鞆から取り出して気ままにページをめくつてもらいたいからであり、時間が経てば風化して骨董品になつてくれるのがいいと思うからである。もちろん、デザイナーとして、みなさんの手のひらの中でこの本がいい雰囲気かを醸し出すように工夫してもいる。要するに、情報を右から左へと移すのではなく情報を慈しむという観点で書籍の魅力を意識している。「(エ)」

僕はノスタルジー(注6)に捉ひわれて紙をひ畳ましているわけではない。僕は電子メディアが嫌いではないし、電子

メールがないともはや困惑するほどに、既に情報技術とは深い関係を結んでしまった。だからこそ、紙メディアを用いる場合には、無意識にはなく、はっきりとした意志を持ってこれと向き合いたいと思うのである。「(オ)」電子メディアが情報伝達の実質的な道具であるとするならば、書籍は「情報の彫刻」である。

注1 マテリアル……物質、素材、原料。

注2 モニタースクリーン……パソコンの画面を映し出す機器。

注3 ペーパーレス……紙を使用しなくなることを。

注4 ストック……蓄積、蓄え。

注5 デジタルデータ……コンピューター処理が可能になっているデータ。

注6 ノスタルジー……懐旧の念。

問五 次の文は、本文中に入るべきものである。もつとも適当な箇所を「(ア)」～「(オ)」の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

電子メディアの台頭のおかげで、紙はようやく本来の魅力的な素材としてふるまうことができるようになったのだ。

問六 空欄「」・「」に入るもつとも適当な語を、それぞれ次の(ア)～(エ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- |   |         |         |         |         |
|---|---------|---------|---------|---------|
| I | (ア) 総合的 | (イ) 合理的 | (ウ) 典型的 | (エ) 論理的 |
|   | (ア) 抽象的 | (イ) 具体的 | (ウ) 感覚的 | (エ) 機械的 |

問七 傍線部「そういう観点」とはどのような観点か。もつとも適当なものを次の(ア)～(オ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) 紙は本来物質であるが、その物質性ゆえに世界三大発明の榮譽を担っていた。
- (イ) 紙は本来物質であるが、文字や映像を媒介するだけの平面という実務的な任務を担わされてきた。
- (ウ) 紙は本来物質であるが、物質としての魅力はモニタースクリーンの魅力に劣っていた。
- (エ) 紙は本来物質であるが、媒介としての性質が電子メディアに劣るために、物質としての価値も下がった。
- (オ) 紙は本来物質であるが、その物質性が媒介としても魅力を発揮した。

問八 空欄「甲」・「乙」に入るもつとも適当なものを、それぞれ次の(ア)～(カ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) かさばったり汚れたりする素材をあえて用いて表現された情報
- (イ) 便利ではないが味わい深い情報
- (ウ) 適度な重さや手触りを持った素材を用いて表現された情報
- (エ) 高速で移動させたりするだけではない情報
- (オ) 軽量になり便利になった情報

(カ) 小さく格納されて存在感の希薄になった情報

問九 本文の論旨からいって、これからの書籍のデザインはどのようになるべきだと筆者は考えているか。次の

(ア)～(エ)の中には、不適当なものが一つある。その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) 紙の欠点を人に意識させないということを考えたデザイン
- (イ) 紙が人の手に触れるということがもたらす効果を最大限にするデザイン
- (ウ) 紙の持つ劣化や重さという負の部分を生かしたデザイン

- (エ) 紙の性質を通して受け手が情報を味わうことのできるデザイン  
 (三) 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

ある人はいく、人は慮おもんばかりなく、いふまじきことを口疾くちとくいひ出いだし、人の短きをそしり、したることを難なんじ、隠すことをあらはし、恥ぢがましきことをただす。「ア」「われはなにとなくいひ散らして、思ひもいれざるほどに、いはるる人、思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、甲恥をもあたへられ、身果みはつるほどの大事にも及ぶなり。「イ」「笑みの中の剣つるぎは、さらでだにもおそるべきものぞかし。心得ぬことを悪あしざまに難じつれば、かへりて身の不覚あらはるるものなり。「ウ」「

大方おほかた、「軽かるき者になりたれば、」それがしに、そのことな聞かせそ。かの者にな見せそ」などいひて、人心をおかれ、隔てらるる、口惜くちをしかるべし。「エ」「また、人のつつむことの、おのづから漏もれ聞こえたるにつけても、「かれ離れじ」など疑はれむ、面目めんぼくなかるべし。

「」、かたがた人の上をつつむべし。多言留たげんととむべきなり。「オ」

問十 次の文は、本文中に入るべきものである。もっとも適当な箇所を「ア」「イ」「オ」の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

これらすべて、あるまじきわざなり。

問十一 空欄「」の中に入るもっとも適当な語を、それぞれ次の(ア)～(オ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- |     |      |     |       |     |     |     |      |     |     |
|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| (ア) | 足    | (イ) | 口     | (ウ) | 手   | (エ) | 身    | (オ) | 耳   |
| (ア) | かかれど | (イ) | さりながら | (ウ) | さるは | (エ) | しかれば | (オ) | もしは |

問十二 傍線部甲のように述べられる理由として、もっとも適当なものを次の(ア)～(エ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) 自分では何気なく発言したことであっても、いわれた方としては思い悩む場合もあるから。  
 (イ) 人は、他人から悪意に基づく批判を受けると、思いつめたり、腹立たしくなったりするから。  
 (ウ) 人々のあいだで話題にされただけでも、いわれた人間としては憤りを感じることがあるから。  
 (エ) 元々は思い入れのなかったことでも、人からいわれているうちに気になってしまうことがあるから。

問十三 傍線部乙の意味としてもっとも適当なものを次の(ア)～(エ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) あの人に、そのことを伝えない方がよからう。  
 (イ) 彼には、そのことをよくい聞かせてくれ。  
 (ウ) 誰それには、そのことを話すなよ。  
 (エ) 私に、そのことを聞いてくださいよ。

問十四

本文の内容に合致しないものを次の(ア)～(オ)の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) ある人が謹慎していると聞き及んだときには、なるべく近づかない方がよい。
- (イ) さほど考えもせずに、他人の欠点についていろいろと非難するのはよくない。
- (ウ) 他人の身の上に関して、あれこれと発言することは遠慮すべきである。
- (エ) 当人が恥ずかしいと思うようなことを問いたただすのは、望ましくない。
- (オ) よくわからないまま人を批判すると、自身のあやまちを露呈させることになる。